

木曽川文庫は治水の資料館。 水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、 これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。 春号は、木曽川と可児川とともに成長した可児市から その歴史や用水事業を中心に、 歴史ドキュメントでは、御手伝普請を特集します。







岐阜県可児市

ふるさとの街・探訪記

川の恵みを受けながら、 歴史を刻む可児市

エリア・リポート

- ・用水事業の歴史と変遷
- ・水辺の景観を守る、多彩なプロジェクト

気ままにJOURNEY

歴史のロマンが漂う可児市は、爛漫の春

歴史ドキュメント

御手伝普請における幕府の組織とその役割

TALK&TALK

御手伝普請の実情

民話の小箱

船着き観音

国土交通省中部地方整備局 木 曽 川 下 流 河 川 事 務 所



可児市の地形

地の西には鳩吹山、南には標高二百m あります。 前後の丘陵性の山々、東には浅間山が 河岸段丘を形成しています。この平坦 をなす平坦地で、可児川沿いに三段の し、市の中心部は美濃加茂盆地の一部 岐阜県の南東部・木曽川左岸に位置

児川は市のほぼ中央付近で久々利川を 央を東西に流れる久々利川があり、可 市のやや北側を東から西に流れる可児 川、大森川・姫川を集めて市のほぼ中 河川は、国定公園・鬼岩を源流とし

伊勢湾 器·輸送用機器·窯 辺部として電気機 中部工業地帯の周 り、南部は県下最 注いでいます。 大級の工業団地の 三〇㎞ 圏内にあ 市及び岐阜市から 可児市は名古屋

岐阜県

愛知県

木曽川



業・金属等の工業が発達しています。

合流して木曽川に

柿下の銅鐸

ど五ヵ所あ 北裏遺跡な 弥生遺跡は、 は一一ヵ所 尖頭器が採集されています。 縄文遺跡 ある北裏遺跡から、先土器末期の有舌 木曽川と可児川との合流点の左岸に



出土しています り、それらから住居跡や土器・石器が

ると今渡ダムが完成。 平成一七年には、 兼山町

木曽川の水運も発展を遂げました。 昭和にな 時代には、木曽衆の宗家干村家が屋敷を構え

と合併し、新たな一歩を踏み出しました。

した。古代初期から水田中心の農耕が行われ、

承久の乱では、合戦の舞台となりました。 江戸

数百基の古墳が分布する美濃の一大中心地で

木曽川や可児川、久々利川が流れる可児市は

典型とされています。 されたとされる銅鐸は、近畿式銅鐸の 享保一八年(一七三三)、柿下で発見

古墳期の一大中心地

われており、現在でも数十基が存在し ています。 ては数百基の古墳が分布していたとい 可児市は古墳集中分布地域で、かつ

ます。 を理解する上で、貴重な遺物となってい から中期の杯が多数出土し、古代窯業 された馬乗洞古窯からは、七世紀初頭 す。昭和五二年(一九七七)、柿田で発見 兵衛塚一号墳は、県下最大級の方墳で いたようです。七世紀築造の川合次郎 りには幅二五mの周溝がめぐらされて 約七二mの前方後円墳で、墳丘のまわ 長塚古墳は四世紀に築造された全長

泳宮行幸の伝説

久々利地内に残る泳宮の古跡は、景

行天皇が美濃へ 地元の豪族、八坂 ば天皇は滞在中、 日本書紀によれ いわれています。 置した仮宮だと 行幸した折に設

ことから、古代初期には、水田中心の農 ごく最近まで条里制の遺構が見られた 述が残されていることや、この地区には にしたと伝えられています。こうした記 入彦命の娘を妃

などの荘園・郷が成立しました。 降は、明知・帷子・荏戸・久々利・大井戸 が可児市に比定されます。平安中期以 のうち、郡家・亘理・大井・矢集の四郷 「和名類聚抄」によれば、可児郡七郷 耕が広く行われていたようです。

群雄割拠した戦国時代

鎌倉幕府倒幕の兵を挙げた承久の乱 土田)で火ぶたを切っています。 は、美濃国では、大井戸の渡し(可児市 承久三年(一二二一)、後鳥羽上皇が



約百数十年間、歴 応永年間(一三九四~一四二八)に土岐 は、美濃の守護の流れを汲む名門です。 いたようです。中でも久々利の土岐氏 氏など、それぞれの武将が勢力を競って 久々利氏、瀬田付近に土岐明智氏、塩河 で、天正一一年(一五八七)に至るまで に可児氏、今地区に小池氏、大森に奥村 三河守行春が久々利城を築城したよう 戦国末期になると、久々利に土岐

守悪五郎を名乗つ 代城主が土岐三河 久々利城の北西

明智光秀出生の地 には、戦国武将の

れるまで、明智氏の居城だったとされて 治二年(一五五六)、斉藤義龍に攻略さ といわれる長山城(明智城)があり、弘

利城主土岐悪五郎に暗殺され、城も落 文一七年(一五四八)斉藤正義は、久々 は、斉藤道三の養子・斉藤大納言正義 とされたと伝えられています。 によって築かれた本格的山城です。天 兼山町の古城山の頂上にある烏峰城

蘭丸・坊丸・力丸はいずれも信長に仕 ました。可成の亡き後、その子の長可・ 可・忠政と続く森氏七代の居城となり 成は、城の名を金山城と改め、以後、長 与えました。烏峰城の城主となった可 濃進出とともに、可児の地を森可成に 永禄八年(一五六五)、織田信長は美



山の地名は兼山に改められました。

近世の千村氏支配

る木曽衆が久々利に、美濃国奉行岡田 善同が姫の下切に、慶長九年(一六〇四) 関が原の合戦後、千村氏をはじめとす

> 地替、承応 (一六三二) 岡田氏が給 た。しかし、 を構えまし れぞれ屋敷 じられ、そ が徳野に封 買永八年 に平岡頼勝 二年(一六

七)千寸も人よう…・
七)千寸も人よう…・
歴 氏のみでした。 住し、幕末まで続けて居住したのは千村 七)千村氏以外の木曽衆が名古屋へと移

氏の一族、旧士の集団である、木曽衆」の 宗家として、重んじられてきました。 といわれ、木曽福島の山村家と並び、木曽 千村氏は信州の出で、木曽義仲の子孫

榑木(材木)を管理する役職です。 功を賞して千村家に四四〇〇石を与え の役を千村氏に任命。戦後、家康はその 曽谷の平定と先導役が必要でしたが、**こ** 行とは、幕府直轄の山林から伐採される 西に向かう秀忠の軍を進めるために、木 慶長八年には信州伊奈一万石の代官と **遠州の榑木奉行を命じています。榑木奉** 関が原の合戦の折、家康は中山道を

山村氏は尾張藩の家臣となりますが、 する旨を千村氏、山村氏に伝え、尾張藩 曽の山と川を尾張藩に加封し尾州領と への転属を申し渡しました。このとき、 元和五年(一六一五)、徳川家康は木

> 州榑木奉行は従来通り。幕府からも江 らの強い要望もあり、千村氏は尾張藩 代の義務を負っていました。 戸屋敷を拝領し、大名に準じて参勤交 に属しました。とはいえ、伊奈代官、遠 しかし元和五年、尾張藩主徳川義直か 所管地を有するため、固辞しています。 千村氏は木曽と隔たった信州・遠州に

性格は、江戸時代において稀有な例と いえます。 千村氏の幕藩二重封臣という特殊な

水害と村役

見検地で約高九五石あったのが、明治 高の四分の一にあたっています。 そのほとんどが川欠によるもので、村 た。中でも下田尻村では、江戸初期の石 うに洪水による被害が発生していまし 下田尻村や下切村などでは、毎年のよ 二年(一八六九)には約六九石に減少。 久々利川が可児川へ合流する付近の

に架けたり修理したりしていました。 なる流木を拾ったり、道や橋などを仮 を村役として行い、川の流れの支障と 村では出水があると、その応急修理

中山道と木曽川の川湊

それらとつながっていました。 し、土岐街道・尾張街道の主要街道は 西に走る中山道と木曽川の水運を軸と 近世の交通・運輸は、市の北部を東

で、寛永一七年(一六四〇)には木曽川 土田宿は中山道以前からあった宿駅

野市場湊 可児川 クマ利川 尾張街道 九四)伏見 しての使命 宿の新設で 宿(美濃加 山道の宿と 土田宿は中 七年(一六 ました。元禄 用されてい 宿となり、利 茂市)との合 対岸の太田 をはさんだ

ますが、それ以後は尾張藩の公路・尾張 を終えてい

街道の宿駅として利用されました。

湊、兼山湊がありました。 木曽川の川湊には、大脇湊、野市場

大脇湊は、木曽川上流筋において最も

児川が木曽川に合流しており、この合流 早く開かれた湊です。そのすぐ上流で可 所でした。このため大脇湊は、室町時代 地点は、舟の運行を阻害する最大の難 末期まで木曽川上流筋の渡航終点とな

す。しかし、その後は、新興の川湊に押さ れ、大脇湊は衰退していきました。 として、以後の船役は免除されたそうで 具類の流送に大脇湊を利用。その恩賞 流すべく急いで東山道を下った際、武 悩まされた徳川秀忠が、家康本隊と合 この大脇湊です。信州上田の真田勢に 関が原の合戦の折に活躍したのが

> 城を築城した頃から発達しました。森 長可の時代となり六斎市を開き、塩の なくなったことや、四㎞上流に黒瀬湊 政が信州へ転封されると、城主の庇護が 集散地として栄えるようになりました。 の特権を与えるなど、商業振興に力を 専売業者や商人を城下町に招いて免税 入れるようになると、兼山湊は、物資の 八百津町)が開かれ、兼山に代わって終 ∪かし慶長五年(一六○○)、長可の子忠 兼山湊は、室町時代、斉藤正義が烏峰

ました。 衰微していき ことが影響 航地となった し、兼山湊は

までは、信州 が開設される すが、この湊 開設は不明で

打撃を受けている兼山湊にとって死活 す。野市場の発展は、黒瀬湊によって大 焼物)を流送していたのも、野市場湊で れています。また、土岐郡の物資(美濃 旗本中川氏の年貢米を野市場湊から汀 なりました。元禄三年(一六九○)には、 運び、ここから舟で流送されるように ていました。しかし、いつの頃からか兼 資は、兼山湊から舟で下流へ流送され 山を経由せず、中山道を野市場村まで 方面から出荷される京・大阪向けの物 、へ向けて流送したという記録も残さ

野市場湊の

が陣屋に対して、野市場湊の発展の影 問題。そのため、兼山湊の庄屋や船問屋 すが、地理的条件を背景に発展してき 響を受けて困窮している様子を訴えま た野市場の優位は動きませんでした。

明治以降の交通・運輸

います。

が毎秒二〇〇t以下にならないように

逆調節の均等放流をするようになって

町・姫治村の一部を編入しました。 町村が合併し可児町が誕生、その後御嵩 展し、昭和三〇年には可児郡西部の七万 明治以降は、製糸業の導入とともに発

口が急増しました。 り、名古屋市のベッドタウンとして人 住宅団地が盛んに建設されるようにな が開通すると、可児市周辺の丘陵地は され、名古屋・岐阜方面への直通電車 頃より、名鉄の犬山~広見間が複線化 すます物流の拠点は多治見へ傾斜する 〜多治見間の軽便鉄道が開設され、ま 次第に衰えていきました。その後、広見 もに、交易の中心は多治見へと移行し、 ○)、中央線が多治見まで開通するとと 躍していましたが、明治三三年(一九〇 どの、横浜への出荷の際の荷為替で活 銀行が開設され、加茂・恵那の生糸な の水運と中山道が中心で、今渡が栄え ことに。しかし、昭和四三年(一九六八) ています。明治一五年(一八八三)、今渡 交通運輸は、明治期中期まで木曽川

今渡ダムと今渡発電所

渡ダムは、木曽川本川の最も下流に建 昭和一四年(一九三九)に完成した今

上水道・農業用水に利用され、一定流量 流点から直下流に位置しています。 設されたダムで、木曽川と飛騨川の合 今渡ダムは、発電・洪水調節のほか、

施行しました。 木曽川国定公園に指定されています。 日本ラインと呼ばれる渓谷が続き、飛騨 七年全国六五〇番目の市として市制を 着々と整備が進む可児市は、昭和五 今渡ダム下流から犬山市にかけては、

〇万人を超え、可茂地域の拠点都市と 平成一七年、兼山町と合併し人口も

して発展をしています。



木曽川の日本ライ

『兼山町史』 昭和四七年 兼山町『可児町史』通史編 昭和五五年 可児町 参考文献

'角川地名大辞典 岐阜県"角川書店 木曽三川流域誌。 平成四年 建設省 (国土交通省)

ふるさとの街・探訪記





業が本格化。洪水制御はもちろん、農業用

災溜池施設事業や愛知用水事業など、大事

水として活用されています。

被害は深刻でした。昭和になると、可児川防 万、久々利川や可児川は度々氾濫し、水害の 可児川・久々利川などが流れながらその 古代から水田が開けた可児市は、木曽川



時代にかけ開田されていたようです。 すでにその一部は、弥生後期から古墳 域は、いずれも中小河川によって形成さ れた後背湿地を利用した水田であり、 大別されます。今渡・土田を除く他の地 などの各流域と、今渡・土田の平坦地に 大森川・姫川・横市川・矢戸川・中切川 可児市の水田は、可児川・久々利川・

在とほぼ変わらぬ水田分布を示すこと と考えられています。 漑用水による耕作が行われていたもの から、すでに可児川・久々利川からの灌 に条里制的遺構が見られ、これらは現 久々利川流域、広見東部の可児川流域 八世紀には、久々利・平牧地区の

溜池の開発

岸と右岸とで用水をめぐって水争いが が広く、日照りが続くと上流と下流、左 両川の主要用水は、図に示す通りです。 かし、両川の流量に比して灌漑面積 水田地帯を貫流する可児・久々利川

> どが近世までに開発されています。 池・柿下溜池・桜溜池を除けば、ほとん 池事業として戦後開発された小渕溜 時点で一四六ヵ所。ほとんどが明治以 なり、その数は、昭和五三年(一九七八) を補う大小の溜池が開発されるように 繰り返されました。このため、用水不足 前に作られたものです。可児川防災溜





幻の見渡田の開墾開鑿事業

柿田遺跡水制遺權

設の整備は、地域の悲願でした。 き込むのみ。旱魃の被害は多く、灌漑施 水を利用した溜池から辛うじて水を引 たがってこの地域の水田は、小河川や天 川に求めることができませんでした。し 今渡・土田地域は、木曽川との比高差が 一〇mほどあるため、農業用水を木曽 木曽川沿いの河岸段丘上に位置する

われ、日照りが続いた昭和一九年(一九 植えを行う 杭つき棒田植え」が度々行 けて苗をさし、その中に水を入れて田 中でも川合地区は、田に杭で穴を開

AREA REPORT

で田に水を入れたものでした。 四四)には小学校児童を動員して、土瓶

ダム上流の木曽川左岸よりの水利権を 墾幹線開鑿組合」を設立しました。この 可能になると考え、昭和一四年、見渡開 はこの水位の上昇を利用すれば灌漑が ることになりました。当時の今渡町長 の堰堤により水位が二四~五m上昇す 水事業に引き継がれ、実現することと 大戦の影響で中止。この事業は愛知用 を敷設して通水するというものでした 獲得し、川合・今渡・土田地域まで用水 の木曽川に兼山発電所が建設され、こ 看工は昭和一五年。しかし第二次世界 事業は県営となり、計画の概要は、兼山 昭和一二年(一九三七)春、兼山町内

歩。この組合は、可児土地改良区」の設 立とともに解散し、揚水施設も愛知用 ました。工事による受益面積は、五〇町 可能になりました。この事業を進める 画しました。昭和一四年、川合地区に今 ると、ポンプによる木曽川の揚水を計 田開墾幹線開鑿事業の中止により、木 九四八)に着工し、ポンプニ台を設置し ために川合地区は今渡地区とともに、 渡ダムが建設されると、水位の上昇に 曽川上流からの用水敷設が不可能にな 今渡水利組合」を設立。昭和二三年(一 より約一一 m揚水することで、灌漑が 段丘上に位置する川合地区は、見渡

水の完成後、廃棄されました。

可児川防災溜池施設事業

刻でした 屈曲が多いことから、大雨に際して急激 小河川が流れ、その多くは河床が高く は、可児川・久々利川をはじめとした中 に出水し、田畑に与える被害は、毎年深 可児市の位置する美濃加茂盆地南部

児川が破堤、今地区でも今川通りの堤防 が欠損し、被害を受けています。 明治一四年(一八八一)の水害では可

梁が流失しています。 生させました。今地区の奥池・中池は氾 濫して橋が流失、可児川のほとんどの橋 雨、八月の台風、九月の集中豪雨と連続 して、西南濃地方に未曾有の大被害を発 明治二九年(一八九六)七月の集中豪

> が美しく、多く ジが、秋は紅葉

湾台風でもその被害は、多大でした。 昭和九年の室戸台風、昭和三四年の伊勢 こうした水害は毎年のように発生し、

めの補助水源としても活用しようとし るとともに、灌漑期の水不足を補うた 池を新設することによって洪水調節す たものでした。 の災害を可児川流域上流に九ヵ所の溜 可児川防災溜池施設事業は、これら

池が新設されました。 多治見市に大藪溜池の合計九ヵ所の溜 溜池、真名田溜池、比衣溜池の五ヵ所、 所、御嵩町に、松野溜池、大洞溜池、谷山 には小渕溜池、柿下溜池、桜溜池の三ヵ 昭和二三年に工事を開始、可児市内

> 七年に完成しま ロックフィルダ ムとして、昭和二 した。貯水量は約 我が国最初の

五五万㎡。築堤の ための岩は、県道

囲に遊歩道が整備され、春は桜やツツ により、下流の水田約三五hが潤いま 岩石を使用しました。小渕溜池の完成 した。現在は小渕ため池公園として周 付替えによって採取した約一万 ㎡の



す。また、南側に の人々が訪れま

添えています。 けられ、風情を 橋・小渕橋が架 は木製の吊り

愛知用水事業と松野池の建設

は、昭和三六年に完成しました。県内で 水の供給を目的に建設された愛知用水 は可児市・御嵩町が受益地となってい 三万ねに及ぶ耕作地の灌漑や都市用

年に完成しました。松野池の貯水量は 池が建設されることになり、昭和三六 補助池として、瑞浪市日吉地区に松野 長野県内に牧尾ダムが建設され、その 愛知用水建設とともに、木曽川上流

> 約三三一万㎡ (内洪水調節約九六万 ºm′、農業用水約二三五万ºm′)です。

年(一九六一)に完成しました。 愛知用水事業の一環として、昭和三六 が具体化すると一時中止され、新たに 事業として工事に着手、愛知用水建設 すなわち、昭和二八年、可児川防災溜池 の開始でようやく具体化したのです。 は、昭和二二年着手の可児川防災事業 幾度となく計画された松野池の建設 ようとしましたが、これも戦争で中止。 り、下恵土・中恵土方面の灌漑がされ の後、見渡田開墾事業計画が持ち上が ものでした。しかしこれは実現せず、そ 松野池建設によって解決しようという り、水不足に悩む下恵土方面の灌漑を 松野池建設計画はすでに戦前からあ

可児支線・今渡支線・川合支線

改良されました。 足に悩む灌漑一二四・三ha、畑への灌漑 墾開鑿事業で計画された開田も、この ため、開発が遅れていました。見渡田開 な土地でしたが、木曽川・可児川より 地域です。これらの地域は、平坦で肥沃 市中恵土・下恵土・今渡・川合・土田の 呼ばれ、受益地は、御嵩町伏見及び可児 | Mは、可児支線・今渡支線・川合支線と 長は、実に一一三五㎞。県内の支線三 三支線の完成により目的を達し、水不 一〇~二五mほど高く、水の便が悪い | 五三・五ha、畑の開発二〇五・九haが 愛知用水の受益地全域を走る支線延

REPORT AREA

上流の水遊ゾーと元 が然内生復携 が然内生で連携 でいるででは状のの でいるでは、 でいるでいるでは、 でいるでは、 でい 河川改修により幅が広くなりますが、その中で現状の自然環境を極力保全、再生することとし、失われた生物相を回復する場と 彩なプロシェクトが実施されています。 相を回復する場 します。ホタルの生息地の再生 や魚類の生息水域を確保し ます。 可児市役 ふるさとの川整備事業

> 流れる区間は、可児市のシンボルです。 する河川です。そのうち、中心市街地を 貫流し、可児市を縦断して木曽川に合流 に発する可児川は、松野湖から御嵩町を 可児川堤の桜並木は美しさを競い、春 瑞浪市の西方、日吉地区の高原地帯 ふるさとの川整備事業 可児川

げるために、行政・市民が一体となり、多 を守り、水辺の景観や環境を後世へつな 取り組んできました。その大切な水資源 可児川流域では古くから利水や治水に

間を創りだすことを目的に、現在の白 上を図るとともに、人と水が親しむ空 川は、市民の交流のステージ。この大切な の川」整備事業が進められていました。 ふれあいの場所を守るために、「ふるさと ともなれば多くの人々が集います。可児 この事業は、河川の持つ治水機能の向

多自然型川づくりの基本方針〕 まちづくりと一体となった安全な

然環境に配慮した川づくりを進めるも

水に強い安全な川づくりが行われてい 未改修の市街地部分の河川改修や洪

ます。



川改修の実施 蛇行した可児川

流れを生かした河

可児川の現状の

生かした川づくり の瀬や淵の特徴を

> 周辺の自然環境とのネットワークを形成 可児川を軸として、連続した生態系や

松野湖クリーン作戦

湖と可児川を美しくする会」を結成し や民間団体などが手を取り合って、松野 域である瑞浪市・御嵩町・可児市の市町 した。この大切な水瓶である松野湖と可 人々の悲願が実現し、松野湖は完成しま 川流域の環境保全を促進するため、流 昭和三六年、干ばつに苦しむ地域の

域環境をつくりだしています。 が行われ、多くの魚類が生活できる水

水辺植物の保全・再生

魚類、鳥類のための水生植物を保全し 可児川を休息場、営巣地としている

可児川の生物の再生

生息環境を再生しています かって可児川に生息していたホタルの

目然と共生できる憩いの場の創出 景観と生物の

り、自然との共生 の河川利用を図 生息環境に配慮 したなかで、市民

を進めています。 河川を利用したネットワークの形成

われる可児川

トも行ってい 習へのサポー 学校の総合学 加しています 斉清掃に参 市内の小山

ました

毎年開催されています。 者全員が自分の足元から環境保全につ やごみ拾いなどの清掃活動を通じて参加 掃やごみ拾いです。松野湖周辺の空き缶 ふれあいの場をつくることを目的として いて関心を深め、あわせて参加者相互の 会の名前にあるように、主な活動は清

めだかの楽校

の一端を担い、環境フェスタに先駆けて行 境フェスタの参加団体として企画・運営 た、毎年二月末に開催される可児市環 同)&一日水質調査も行っています。ま 七カ所を調査)、二月第一土曜日にはバ オッチング&可児市一斉水質調査(市内 ます。また、七月(海の日)にはカワゲラウ 調査を行う川ウオッチングを開催してい 日)と秋(一一月二三日・勤労感謝の日) かの楽校では、春、四月二九日・みどりの に川沿いを歩き、水質調査と水生生物 ドウオッチング(日本野鳥の会と共 市民グループが主宰する可児市めだ

『兼山町史』 昭和四七年 兼山町『可児町史』 通史編 昭和五五年 AREA REPORT 可児町

『可児町史』通史編参考文献

ます。

戦国の武将たち。時代を超えてなお、気品

天下布武を夢見て、山や川を駆け回った

を放つ桃山茶陶の名品たち



乱世が生んだ、ロマンの花

の世を嵐のように駆け抜けた武将たち で討死した戦国の美少年、森蘭丸。信長 のドラマは、ここ可児の地でも生まれ、天 の、無残の最期を遂げた明智光秀。戦国 に反旗をひるがえし天下を取ったもの 下統一を志した彼らの生涯は、歴史の ページに刻まれています。 織田信長の寵愛を受け、本能寺の変

ける陶芸という芸術が生まれています。 名鉄を利用すれば、約一時間。戦国の□ 代を超えても変わることのない人間の口 い芸術や歴史を残したのでしょうか。 る桃山茶陶の発祥の地。戦いに明け暮れ マンを見るからなのでしょう。そして可児 た乱世は、だからこそこうした素晴らし にはもうひとつ、時代を超えて愛され続 東部の丘陵は、志野、織部を代表とす 可児市へは、名古屋からも岐阜からも 彼らが繰り返し語り継がれるのは、時

マンを探して、歩いてみましょう。 桃山茶陶発祥の地

土と炎が生み出した芸術作品、それ

タチが特徴です。 ダイナミックさ。大胆な図柄、斬新な力 が「静」の美しさなら、織部焼は、「動」の ってくるような温かさを感じます。志野 が桃山茶陶です。志野は、はんなりと白 く、両手で包み込むと、土の感触が伝わ

野と呼ぶようになったのでしょう。 という記録はありません。きっと宗心の すが、宗心が実際、この焼物を愛用した 茶の精神を愛する人々が、この焼物を志 志野宗心。彼が白い茶碗を愛用していた ことから、江戸中期につけられた名称で 志野の名の由来は、室町時代の茶人、

荒川豊蔵氏。志野の土の色が瀬戸には 説を覆したのが、人間国宝の陶芸家、故 愛される志野は、昭和になるまで、瀬戸 の作陶だと信じられてきました。その定 日本的な茶陶の代表的な焼物として

を掘り出して、志 洞で、志野の破片 東部、大萱の牟田 り、ついに可児市の の古窯を歩き回 たことから、美濃 ない土の色であっ

> を実証したのです。 野をはじめ、織部などの名品も、大萱・ 大平を中心とする窯で焼成されたこと

> > ドラマを見つめているようです。

花びらを浮かべた木曽川は、美しい時代の 花々が咲き誇る可児市は、爛漫の春。 桜の

山中に残っています。 垣を巡らせた窯元の屋敷跡が、今でも り、清太夫窯は、織部に優れた作品を残 中でも、由右衛門窯は、志野に優れてお 常雑器などが盛んに焼かれていました。 山之神、窯ヶ根窯などの諸窯跡があり しています。また、江戸時代の豪壮な石 応野などの茶陶のほか、江戸時代にはFI 大平古窯跡群は、由右衛門、清太夫・

出土したことで有名です。 れる浅間窯跡は、初期の志野の陶片が 美濃古窯跡中、古式に属するといわ

九三〇)、豊蔵氏の発見により、美濃古 るところ。特に牟田洞窯は、昭和五年(牟田洞窯をはじめ重要な窯跡が点在す の開窯と伝えられる大萱古窯跡群は、 窯跡調査の端緒となり 天正五年(一五七七)加藤源十郎景成

数々を世に送り出した 蔵資料館があり、名品の 牟田洞窯の隣には、豊

の情熱が伝わてくるようです。 るような迫力。陶器に生涯を捧げた、氏 **豊蔵氏の作品が収蔵されています。 豊蔵氏の瀬戸黒は、見るものを圧倒す**

千村氏の末裔が語る歴史の謎

居館だったところ。幕臣でありながら尾 久々利千村家の屋敷跡が見えてきます。 ここは木曽義仲の流れを汲む千村家の 豊蔵資料館を後に車を走らせると、



気ままにJOURNEY | 8

季節を彩る祭事絵巻

土田白鬚神社流鏑馬祭

天慶3年(940) 平将門追 討の命を受けた平貞盛が戦 勝祈願を行ったのが始まり といわれている神事です。 神社の参堂を疾走する馬上 から、矢を射る勇壮な武家 絵巻が繰り広げられます。

子守神社大祭・子守神社(中恵土). 白鬚神社大祭・白鬚神社 (土田)...

川合獅子舞・青木神社(川合)...... 光秀供養祭・天竜寺(瀬田) 百万遍の町流し・兼山地内

石原の提灯まつり・建速神社(西帷子) 洞窟七夕まつり・お千代保稲荷下の洞窟(羽崎) 灯籠会・雨宮神社(矢戸)......

輪くぐり・白鬚神社(土田) 可児夏まつり・市役所駐車場 (広見)....

兼山祭・貴船神社(兼山)..

久々利八幡神社大祭・八幡神社 (久々利).......



4日第1日曜日

7月1日から1週間

..8月第2土・日曜日

.10月第3日曜E

...4月9日

久々利八幡神社大祭

からくり人形や獅子舞が演じられ、2台の山車も繰り出します。

兼山夏祭・兼山会館ふれあい広場8月盆に近い土曜日の夜

ら忍者のような役 がら、千村家について話してくださいま 孫。 明治時代になり木曽氏に改姓され 出会いました。木曽さんは、千村氏の子 の建物を構えていたようです。 千村家はどうや 許されぬお殿さま。屋敷跡を案内しな たため、現在は木曽氏を名乗っていら いていると、作務衣姿の木曽義明さんに 1やいますが、世が世なら、話すことも 春の優しい風に包まれて屋敷跡を歩 書院など、二一棟 は、講武館、居館 語るように、往時 が、その権勢を物



割をしていたので

は考えています」 うな任務を負っていたのではないかと、私 は伊賀の忍者ですが、千村家も同じよ なり、伊賀出身の地侍を召抱えて編成 有名な服部半蔵も家康に仕えて旗本と た伊賀同心を配下に置いた。同心と

は珍しい家柄です いう、封建時代に 張藩にも仕えたと

展までの歴代当主を中心にして、数十基 の立派な墓が立ち並んでいました。 めるかのように、初代良重から一一代仲 る東禅寺の境内には、そんな時代を見つ 、時代の裏の世界。千村家の菩提寺であ 決して歴史の表舞台には現れなり、汀

蘭丸のふるさとは爛漫の春

移築されたと伝えられていますが、その 蘭丸のふるさとです。森家が国替となっ 古城山の山頂に築かれた金山城は、森 たために、城は解体されて一部が犬山に 雄大な木曽川を見守るかのように、

はないかと思っています。伊賀の忍者で は、一三歳で信長に仕えるまで、素晴ら できます。歴史にその名を残す美少年 が連なり、美しい景色を一望することが 城址からは、南・西側に濃尾平野と木曽 しい自然の中で、健やかに育ったのでし が、北・東面に、飛騨・美濃の高い山々

四季折々の花が咲き、小鳥や虫たちが 遊ぶ、そして戦国の世の歴史ロジンをも 林を生かした散歩道、千本桜をはじめ あります。開放感あふれる広場や自然 公園の渓谷を望む史跡金山城址の麓に 蘭丸ふる里の森は、飛騨木曽川国定



前には、谷の両

て、旅してみませんか。

爛漫の春。花の季節や歴史ドラマを求め

色鮮やかな花が咲き競う可児市は

秘めたこの森は えてくれること 感動と癒しを与 訪れた人の心に 古城山麓の眼

> 湖のように思え 曽川の兼山瀞が 岩肌が連なる木 岸には奇岩怪石、

山瀞から下流へ 流れています。兼 るほどゆったりと

花フェスタ記念公園

ときを待ちわびているようです。 エスタ記念公園では、今か今かと開花の す。「世界一のバラ園」と賞賛される花フ は、桜並木が薄紅色に空を染めていま リの花が咲きこぼれ、今渡の木曽川岸で 今、美しい花々が咲き競っています。 灯台が、往時のにぎわいを伝えています 向かえば、兼山湊跡に。船着場の石畳と 歴史のロインを今に伝える可児市は 可児川下流域自然公園では、カタク

名古屋方面からお車をご利用の方 国道41号(約60分) 名古屋方面から公共交通機関をご利用の方 名鉄犬山線(約30分) 名鉄広見線(約20分) 豊田方面からお車をご利用の方 伊勢湾岸自動車道·東海環状自動車道(約40分)

可児市役所

〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地 TEL0574-62-1111 URL/http://www.city.kani.gifu.jp/



役割分担を特集します。 定から計画、着工を担当する組織や 施していました。その御手伝普請の決 なすべき川普請を、大名が代わって実 大規模な治水事業です。幕府が本来 御手伝普請は、江戸時代に行われた

村々からの普請の願出

願がありま の多くの歎 の動機とし では、普請 御手伝普請 宝暦三年の 摩藩による て農民から で有名な薩 宝暦治水



も続出していました。 けて、幕府に直接御普請を歎願する者 家への歎願に止まらず、江戸表まで出か

成するためにも、村々から提出される 以外に方法がありません。また、公儀に 歎願書は、村々の要求と他の村々との利 おいても普請目論見(工事設計書)を作 **晋請を実現するためには度重なる歎願** 自普請が原則の社会において、公儀

害関係を推量するのに極めて有効な資

想像できます なかった時代においては、村々で作成す だして、水行普請存寄書」の提出を命じ 先立ち、私領役人達を笠松役所に呼び る普請計画は精度の高いものであったと を添えて役所の許可を得なければなら ます。自普請であっても目論見・絵図面 計画をたて絵図面を添えて提出してい ています。各村々では競って各自で普請 宝暦三年の御手伝普請では、工事に

勘定奉行による普請目論見

り老中が決定していました。 願、美濃郡代・勘定奉行などの上申によ 御普請の着工は、このような住民の歎

見によって施工することが勘定奉行に 施後、目論見を作成、老中への目論見の 上申、決定を経て、老中から所定の目論 対して普請目論見の作成を命じること に始まり、勘定所によって現地調査を宝 普請の流れは、老中から勘定奉行に



中の下にあ

でした。老

定所の一員

命じられていました

なりました。 中また工事完了後に決定されるように ていましたが、後年になるに従い工事途 行への施工命令とほぼ同時に行なわれ 御手伝普請の決定は、当初は、勘定奉

勘定所の組織

行と共に訴訟裁決の最高機関である評 る勘定奉行は定員四名。社寺奉行・町奉 御手伝普請の目論見や施工を指揮す

> を除き、全国の郡代・代官を指揮して直 る関東郡代 州を支配す 直轄で関八 その任務に 分れ月番で と勝手方に あたっていま した。老中 って公事方

轄領を管理していました。

味役として活躍していました。 して有名な井沢弥惣兵衛為永も勘定吟 役があります。紀州流の水工技術者と 勘定所役人として登用されていました。 た。このため、土木技術に優れた人材が 力を維持する川普請も重要な役目でし 方面にわたりましたが、直轄領の生産 勘定奉行に次ぐ役職として勘定吟味 その職務は、年貢の徴収・訴訟など多

いませんでしたが、勘定吟味役はおおお もこのような業務分担の一分野の役人 頭として御殿詰・勝手方・新田方などに 度、支配勘定が七〇名程度で組頭を筆 ね一二名、その下に御勘定が二百名程 によって所掌されていたと思われます。 分れて業務を分担していました。川普請 勘定所の定員は度々変化し一定して

2代

岡田将監善政 岡田将監善同

万治三(一六六〇)

寛文七(一六六七)~

初代

寛永八(一六三二)

御手伝普請

美濃郡代歴任表

御勘定や勘定組頭の働き

6代

元禄一二(一六九九) 貞享二(一六八五)~

辻甚太郎守雄

享保三(一七三五)

辻六郎左衛門守参 岩手藤左衛門信吉 甲斐庄四郎右衛門正之 杉田九郎兵衛直昌 名取半左衛門長知

享保三(一七二八)

4代

見のため検分しています。 また天保七年(一八三六)の御手伝普請 惣兵衛・勘定組頭の岸彦十郎らが係り 吟味役の鈴木門三郎・勘定組頭の加藤 ます。享和元年(一八〇一)の御手伝普 らが目論見のため検分を命じられてい は、御勘定の稲守三左衛門・倉橋与四郎 に任命されましたが、下役人によって普 請では、勘定奉行の柳生主膳久通・勘定 滕原八三郎が現地に派遣され普請目論 では勘定組頭の竹内平之丞・勘定役の 請目論見をさせたと伝えられています 明和五年(一七六八)の御手伝普請で

10代

滝川小右衛門貞寧 井沢弥惣兵衛為永

京保二〇(一七三五)~

青木次郎九郎安清

室曆八(一七五八)

千種清右衛門直豐

明和三(二七六六)

13代 12代

千種六郎右衛門惟忠

天明六(二七八六)

安永八·天明三明和五·明和五

なわれました。 勘定組頭などの勘定所役人によって行 の規模に関係なく、主として御勘定や 検分は、老中から勘定奉行に命じられ ていますが、直接現地での検分は、普請 このように普請目論見のための現地

> 20代 19代

美濃郡代の役割

22代

柴田善之丞

もに、美濃における治水事業の現地業 美濃郡代は、水行奉行高木三家とと

> 24代 23代

屋代増之助

慶応三(一八六七)~ 慶応三(一八六七)

> 受け、普請目論見や各普請にあたってい えたり、幕府へ上申したり、普請を直接 れる願出を審査し、自普請の許可を与 方役のほとんどは世襲で郡代の指揮を た治水技術者の常駐が必要でしたが 行ったりしていました。このため熟練し 務を主管していました。村々から提出さ この任にあたったのが堤方役でした。堤

行い、目論見の作成にあたっていました。 命じられ、勘定所役人と一緒に検分を おいても、美濃郡代はその都度、検分を 御手伝普請における目論見作成時に

代官吉田久左衛門をはじめ、勘定所の 命じました。 内・普請役長岡文兵衛らに現地検分を 普請役元締萩野藤八郎·普請役菊地惣 は、勘定奉行榊尾若狭守の内申により 宝暦三年の御手伝普請において、幕府

衛門らを派遣して検分させました。 水による被害が生じましたが、これに対 しても幕府は、勘定所普請役村松平右 代官吉田らの現地検分の末期に、出

帰り復命していますから、現地調査期間 代官吉田らは九月一五日には江戸に

17代

辻甚太郎守貞 鈴木門三郎正勝

三河口太忠

文化三(二八〇六)~ 文化二(一八〇五)

渑川小右衛門惟

文化士(二八三八三四)

16代 15代

寛政一一(一七九九)

寛政一八

文化二·享和二

辻六郎左衛門富守

寛政三(一七九二)天明八(一七八八)~

千種鉄十郎

四分月、工事設 日を含めて約 は往復の旅行 仕上げていま 約二ヵ月強で 計書の作成は、

天保六(一八三五) 文政一(二八二八)文化二(二八四)个

勘定所では

見を作成し、同年一二月六日に勘定奉 代官吉田らの検分に基づいて普請目論 施行の上申をしています。 行榊尾若狭守の名でもって、老中に工事

水行奉行高木三家の役割

高木三家

にあって、寛 は 岐阜県上 いましたが、 行を勤めて 国役普請奉 永年間から 石津町多良

旗太高太家陣屋跡

う管理する役目を勤めてきました。 おいて洪水の流れに障害が生じないよ じられ、三家が一年交替で木曽三川に 宝永二年(一七〇五)には水行奉行を命

役目でした。 円滑に流下できるよう河道を維持する て、水行奉行は、河川を監視し、洪水が 築造維持する普請掛であることに対し 時においては、郡代が堤防などの施設を 郡代と水行奉行の職務分担は、平常

「以切紙致啓上候、・・・木曽川通川除国 奉行から高木三家に宛てた書状には 候」とあり、普請の都度、見廻役を勤め 御家来をも折々為見廻御差出可被成 付、先例通被仰合、御壱人宛御見廻り 役普請被仰付候間、御普請役差遣候! 明和三年の国役普請に際して、勘定

御手伝普請においても職務内容は平

ていたことが判ります。

御手伝普請の流れ

対して、高木三家は、明和三年の御手伝 見作成や普請掛を命じられていることに 常時の延長線にありました。郡代が目論 普請を除き、すべてが見廻役でした。

受けていましたが、高木三家に対して をうけています。「右濃州・勢州川々御普 は、別途、書面により次のように申渡し 代らは江戸城中において直接申渡しを 承合候、右之通可被相達候」。 向守・古坂与七郎・川井次郎兵衛可被 請御用可被相勤候、委細之儀者、小野日 明和三年の御手伝普請では、美濃郡

候」と、この度は見廻役の役目はないと らの勤方にたいする照会に対して、「此 度は水行御普請無之間増人二は及間敷 し、このための増員の必要はないとして 勘定奉行小野日向守は、高木三家か

べてが水行普請であったため、まず高木 また、寛政八年の御手伝普請ではす

> 頭らが検分を命じられています。 三家が見廻りを命じられ、次いで勘定組

普請の最高責任者は勘定奉行

役人が普請掛に任命されています。勘定 を担当する普請掛を任命しますが、最 奉行は職務上から在府のまま指揮をと などを筆頭に普請役など数名の勘定所 係なく勘定奉行が任命されていました。 高責任者は御手伝普請や公儀普請に関 、ますから、現地での直接的な指揮は また、同時に勘定吟味役や勘定組頭 老中は普請を決定すると、直接工事

遣役人の筆頭者が行ない、各工区には墓 普請の総括は勘定吟味役など現地派 勘定吟味役などが行いました。

府勘定所役人と美濃郡代配下の堤方役 普請の直接指揮に当たっていました。 を組み合わせて配置しました。彼らは 美濃郡代は、当然のこととしてすべて

普請の決定 老中 作成を下命 上申 目論見の上申 普請の下命 普請の下命 御手伝の下命(藩士現地派遣御手伝) 御手伝の下命(お金御手伝) 勘定所 勘定奉行 勘定吟味役・勘定組頭・御勘定 上申 見廻役を下命 目論見の作成を下命 普請を監督 現地検分/目論見作成 普請掛を下命 晋請を担当 見廻役を下命 晋請掛を下命 高木三家 美濃郡代 歎願 普請を担当 普請場 現地検分 / 目論見作成 普請を担当 藩士を派遣 歎願・上申 目論見の作成・決定 普請の実行(藩士現地派遣御手伝) 普請の実行(お金御手伝) 御手伝大名

す。また、高木三家が主として見廻役と の普請に普請掛として任命されていま して任命されていることも同様です。

区に分割して行なわれました。これは現 いることと同様です。 在の大規模な土木工事でも行なわれて 普請は、その規模によって幾つかの下

区に堤方役人などを配置し、設計の指 郡代は高木三家とともに普請見廻役を ています。 命じられています。郡代役所では、各丁 示や材料の受払い、工事の監督にあたっ

役目を与えられています。 代は幕府方の工事監理者として重要な 細申談候筈之事」とあるように、美濃郡 田久左衛門方より御手伝方役人へも秀 渡された指示文書に「青木次郎九郎・吉 が、勘定奉行一色周防守より薩摩藩に 手まで四工区に分けて施工されました 宝暦の御手伝普請は一之手から四之

当しています。 現場で丁張を行なうなど普請を直接扣 五年の御手伝普請では、堤方役が普請 は普請掛、お金手御伝普請となった明和 含まれていた明和三年の御手伝普請で また美濃郡代は、一部に公儀普請が

毎に普請掛として活躍しました。ただ れ、飛騨郡代が代わりに普請掛を務め 不正工事の疑いがあり普請掛を外さ 一つの例外は天保七年の御手伝普請で、 このように美濃郡代は、御手伝普請

延享四年の御手伝普請において、美濃

間、寺院又は百姓家一でも借請、小屋場

に相用候儀勝手次第可被致候」と小屋

五年の御手伝においては、勘定奉行より

お金御手伝への過渡期に当たった明和

小屋場之儀、新規取立候! は及間敷候

かれていたことが知れています。

暦治水では、本小屋は養老町大牧にお 普請にあたりました。薩摩藩による宝 となる本小屋に惣奉行を置き、各工区

御手伝を命じられた各藩では、本部

お金御手伝でも惣奉行を任命

には出小屋をおいて藩士を常駐させて

の新設は必要ないとしています。

御手伝普請が完全にお金御手伝へと

も不明で、普請小屋の設置の必要性そ

を命じられているため、自藩の担当工区 は、普請そのものが終った段階で御手伝 変質した寛政元年の御手伝普請以降

られていました。 毎に惣奉行が定め 請にたいして各藩 すべての御手伝普 せんでした。しかし、 のものが存在しま



大牧薩摩義士役館跡

『岐阜県治水史』上巻 参考文献 昭和五六年 岐阜県

木曽三川明和治水の概要。丸山幸太郎

前号の歴史ドキュメント(10頁 誤りでした。訂正してお詫びします。 下段の表中、和暦 寛永」は 寛延」の 訂正とお詫び



岐阜女子大学地域文化研究所長 丸山 幸太郎 氏

治水の特異性

それを、以後、宝暦治水と呼ぼう。 けて実施された御手伝普請であった。 摩藩が命じられ、翌四年から五年にか れた御手伝普請中、規模が最大であっ たのは、宝暦三年(一七五三)一二月薩 木曽三川治水において一六回実施さ 負担割合

金

両±五〇〇両と言えよう。 金一五〇〇両前後が多く、 伝になってからでは、所領高一万石に 御手伝大名の負担割合は、 お金御手 - 五〇〇

出した「勘定帳」によれば、 金一〇〇〇両の負担割合であった。 の木曽三川御普請御手伝を命じられ金 七万七千余両の普請金納入をしている 宝暦治水完了時、薩摩藩が幕府に提 文化一三年四月、薩摩藩は、 所領高七七万石から見て一万石に 一度目

手伝方は勘定帳を作成し提出したので

書であり、

幕府の指示した通りに、

総工費の一七 六%を負担し 決算は次のようであった。 公儀とは幕府のことであり、 所要材

.手伝普請勘定帳総計

御材木 四六四〇本 公儀御入用

(但し運送等は御手伝方)

万六三四〇両余 公儀御入用 一七六%

七万六九六〇両余

御手伝方

八二四%

(岐阜県歴史資料館蔵「堤方役所文書」

使用せよ、としたのである。 木中の 持山) で伐らせておいたので運送して この勘定帳が、公式の総工費の決算 |部四六四〇本は御料林 (幕府

平均が一万石に一二八一両余であった 伝の場合 暦治水も文化一三年お金御手伝も同率 の負担割合であった。文化一三年御手 この数字を見る限り、 他の御手伝大名の負担割合 薩摩藩は、

> 次のような規程があったと見られる。 摩藩が最遠隔地であるせいか所領地の それはともかくとして、 御手伝普請は 経済評価が低かったせいであろうか。

御手伝方負担

1 負担額は、所領高一万石当り金 総工費の八割かそれ以上

手伝方負担割合の規程通りである。

3 その額の多少は、御手伝大名の 事情あるいはその御普請の規 模によって調整する |五〇〇両 +五〇〇両

年間の財政規模は、 それでは、所領一万石とした場合の ほぼ次のようであ

伝普請費を出すことは 二五パーセント この財政収入から金一五〇〇両御手 基本 (五公五民で年貢米五〇〇〇石納入され 金六〇〇〇両 (商工業者よりの運上金等の納入分) たのを米一石金一両で売却したとして) 運上金等 米納収入 金 | 〇〇〇両 金五〇〇両

ことから見て低率である。 これは、 薩

支出ということであり、

ったであろう。それを、四〇万両とし 財政収入が金四〇万両かそれ以下であ 干両は約二〇パーセントに当たる。 た場合、宝暦治水の勘定帳高約七万七 薩摩藩の場合、土地状況から年間総 大きな負担で 御

ろう どのような額となったであろうか。 施工であり、 油島締切堤など水中難工事が初めての 詳細な設計が出来ていなかったことや 工費が実際いくらになるか、 幕府方も ところが、宝暦治水の実際の経費は 予測できなかったのであ 宝暦治水の総工費

州・尾州川々御普請御手伝を命じられ 奉行一色周防守邸に出頭し、 工するように」と通達された後、 守に呼び出され、「普請は町人請負等 た薩摩藩は、 にせず、設計通り村々百姓に命じて施 宝暦三年一二月二七日、 翌二八日、老中堀田相模 濃州・



丸山 幸太郎氏

昭和12年8月岐阜県恵那市に生まれる。岐阜大学史学科卒、県歴史資料館長、岐阜市明徳小学校長を経て退職。現在岐阜女子大学文学部客員教授、同大地域文化研究所長、池田町在住、主な著書・幕藩制解体過程の農村、「古田織い 部、「日本農書全集第一期八巻」及び「同二期八巻、「岐阜県史、「岐阜市史、「損斐川町史」、「池町史」、「南濃町史」、「平田町史」、「輸之内町史」「恵那市史」、「宮村史」、「神岡町史」、「上矢作町史」等他、多数、

史」等他、多数。 平成14年には「ぎふ観光と食文化(岐阜県先 人顕彰研究会)を発行して注目を集める。

りの見積の由承ったが、一四、一五万 りの工事総額を尋ねたところ、対面し 答であった、という。 両に及ぶべきか」という漠然とした返 た周防守の用人は、「凡そ一〇万両計

色周防守も分かっていて、一四、一五 である。しかし、とてもそれでは出来 ないことは総監督に当たる勘定奉行一 費の七七パー セント負担に当たるから である。その内の七万七千両即ち総丁 表面的には全く規程に合致しているの したのである。 **力両に及ぶかと五割増程度の数字を示** 金一〇万両計りの見積」というのは 御手伝方へ課す負担割合から言って

年間総予算に相当する巨費を木曽三川 政収入額が四〇万両前後であるから、 所領高七七万石の薩摩藩の一年間の財 いるのである。四〇万両というのは ○万両といわれているのは、当たって も合わせて調達した額は、はっきりし 薩摩藩に大変異例な負担をさせたので の治水に支出したことになる。 幕府は た分が三五万両を越えている。 総額四 金策に奔走し、国元や江戸その他から 実際には、薩摩藩が大坂を中心に、

その事由を拾い箇条書にしよう。 なぜこのように費用が増大したのか

と膨大であるのに一藩に命じ 九八か所、抜本治水九〇か所 工事箇所が水害復旧九五か村



2

されたが・・・。 の出願でようやく町人請負と る難工事計二五か所は、 油島締切堤など水中工事のあ にまかせることを制御したた にして、専門業者の町方請負 救いになる) ことを基本方針 (村・百姓へ収入が多く入りお 工事を村々百姓にさせる 効率的に進め難かった。 再三

3 して、 艘の船を頼んで運搬するなど ならず特に石は毎日三〇〇〇 などの資材調達をしなければ 一挙に大量の石材・切土・竹 巨額の調達費がかかっ

4 「増普請」即ち便乗の追加普請や

5 工事の進捗のため薩摩や江戸 見られるが一年ほどの滞在 増強普請が各所で命じられた。 たと見られる。 費・出張費は総計数万両要し 員数は一〇〇〇人を越えたと から現地に派遣された藩士の

6 その修復費がかかった。 工事箇所のいくつかが破損し、 宝暦五年正月の洪水などで、

以上挙げたが、これらの負担が全て御 ともなった。 手伝方の薩摩藩にかかったのであり、 八〇人を越える藩士の自刃多発の一因 経費増大の要因として、 主なものを

るに至るのである。 工期の短縮(工事途中施設の被災除) 難工事の町方請負化、増普請の縮減 を進め、ついに、藩士現地派遣普請 を停止し、お金御手伝普請に切り替え **禃問題を含むもので、幕府側も、以後** 宝暦治水は、藩士現地派遣御手伝の

明和三年御手伝普請の実情

二月七日御普請御手伝が長州萩藩(松 伝普請を実施することにした。 翌三年 が、それだけでは収拾がつかず、御手 普請で復旧工事を流域各所で着工した 極少の村々が多く、 幕府は、 村々から 域で水害の多い年であった。流域各地 水害復旧普請の要請を受け、同年国役 には、水損のため収穫無しで年貢納入 明和二年 (一七六五) は木曽三川流

平家実は毛利家)・岩国藩 (吉川家) 及び小浜藩 (酒井家) に命じられた。 これを、以後、明和治水と呼ぼう。 1 一部お金御手伝・工期短縮

たのである。 の調達費や藩士滞在費の縮減化が出来 それによって工期が短縮化され、資材 年から取り掛かっていたのであろう。 などである。牛牧の閘門はおそらく前 事が幾つか含まれていたことである。 府が実施し工費のみ納入すればよい工 普請と言えよう。 その一つが、既に墓 を既に内包しており、過度期の御手伝 和五年御手伝以後のお金御手伝の要素 萩藩担当の難工事場牛牧輪中閘門改修 遣御手伝の最後の普請であり、 次の明 この明和三年御手伝は、藩士現地派

雨天実行・昼夜兼行で行ったこともあ るように幕吏が追い立て、 御手伝方が とを避けようと、出水期前に完了でき の短縮は、工事途中に水害を受けるこ 幅に短縮されている。勿論、この工期 宝暦治水の一五か月ほどと比較して大 日で、最長の萩藩で七〇日間である。 を行って、終了したのは、小浜藩五月 一七日、岩国藩六月四日、萩藩六月八 工期は、三月二八日に一斉に着工式

2 明和治水の規模と負担

所に比べて、工事場のある村数及び工 所で、宝暦治水の九五か村・一八八箇 数は一一二か村、工事場数は三三四箇 明和三年御手伝は、工事場のある村

TALK & TALK

総工費は、次表に見るように三藩合計 模普請であった。 難工事の多かった宝暦治水に次ぐ大規 金二六万~三〇万両に及ぶものであり 事場数も多く、大規模普請であった。

御手伝藩	工事場の ある村数	工事数 派遣藩士数	概工費
長州萩 36.9万石 (実質76万石)	79	220 (800人)	20万
岩 国 6万石	22	55 (159人) (難工事大榑川)	4~6万 ^集 堰改築を含む)
小 浜 10万石	10	20 (140人)	2万
計	111	295 (1100人)	28万前後か

(実高七六万石) と支藩吉川家岩国藩 抱くであろう。先ず、小浜藩が所領 の負担割合が岩国に重くなっているこ で長州毛利宗家萩藩表高三六万九千石 ○万石なのに負担が少ないこと、次い この表をみた人はいくつかの疑問を

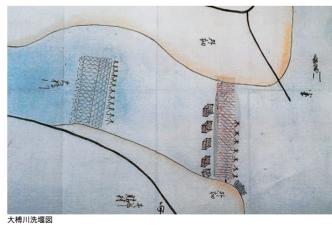
定され、出来栄え見分も三藩中いち早 小規模輪中の上之郷輪中一〇か村に限 ある。このことは、酒井家の工事場が のに対し、譜代の酒井家であるからで 萩藩・吉川家岩国藩が外様大名である 小浜藩の負担の少ないのは、毛利家

> 藩史上これといった事件にはしていな も分かる。着工から一か月半であり、 く五月一六日に終了していることから 関係文書も残していない。

次のような事情があった。 関係文書を伝存している。 これには である。一方、岩国吉川家では、普請 いをしていないのは、萩毛利家も同様 に関することを詳細に記録し、膨大な 関係文書が少なく、藩史上重大事扱

深い溝が出来ていた。 てきたが、幕府は許さなかった。 が実高七六万石で、家格の上昇を願っ 家は許さず、毛利家と吉川家の間には 家が許すならよいとしたが、 宗家毛利 にも幕府にも出願していた。 幕府は宗 藩として扱うように家格の上昇を宗家 て扱われ続けていたので、完全な分立 方、岩国吉川家は、宗家から家来とし 宗藩毛利家は、表高三六万九千石だ

家・清水毛利家を分家し、独立藩にし である。江戸幕府は、吉川広家の功績 軍が勝利できず所領を大幅削減された が家康に通じていて邪魔をしたため西 時、初代吉川広家が宗家 (当主毛利輝 ようやく毛利家の存続は認められた 主にしようとしたが、広家の嘆願で、 から、当初広家を長州・周防二国の当 という思いを長くひきずっていたから いう思いがある一方、宗家では、広家 元は西軍の盟主) の存続に奔走したと これには、吉川家には、関ヶ原合戦 毛利家は、長府毛利家・徳山毛利



せず、家臣家として、藩内でも扱い続 たが、岩国吉川家は分立した藩扱いは

けていた。

洗堰改築となった。 区は、高須輪中内村々及び難場大榑川 は、宗家によってなされ、岩国藩の下 されていて国元から江戸へ向い着いて 宗家が手中にしていて、工事場の分配 伝えられた。 普請箇所を示した絵図は 主松平 (毛利) 大膳大夫重就を通じて いたが、直接仰渡しはなく、宗家の当 岩国藩当主吉川吉五郎は、拝命が予想 明和三年御手伝を命じられたとき、

の築造であり、次いで、牛牧閘門 (逆 水留門樋) と高須輪中の悪水を揖斐川 全長二〇〇メートルの石堰大榑川洗堰 明和治水全体で、最大の難工事は、

> 負担することになった。 捗の苦労と小藩にしては多大な工費を 輪中と洗堰を割り当てられ、工事の進 藩に対し小藩であるが、水難場の高須 藩によって築造された。岩国藩は、宗 たが、大榑川洗堰と万寿圦樋は、岩国 し、萩藩に増普請として工費納入させ た。この内、牛牧閘門は、幕府が実施 に吐き出させる万寿圦樋の改築であっ

書もわずかしか残していない。 では重大事になっていなくて、関係文 の負担であった筈であるが、藩史の上 内の四割ほどだったことになる。 大変 予算額は五〇万両ほどとすれば、その 実高は七六万石であり、藩財政の年間 が、二〇万両ほどで、最大であるが 三藩の負担度については、長州萩藩

は負担度は最も軽いと言えよう。 大きな負担ではあったが、三藩の中で どと見て、その三三パーセントに当り ほどであり、年間総予算額は六万両ほ 御手伝普請費は、多く見て最大二万両 所領高一〇万石の小浜藩酒井家は、

財政打撃を受けたと言えよう。 年間予算額は四万両程とすれば、その 記」に、「総て要用六万両程」とあり という。 吉川家史料中の「濃州御手伝 治維新になっても片付いていなかった のときの負債に官民共苦しみ続け、 て詳細な記録を多く伝存していて、そ 五〇パーセント程となり、未曾有の それに対し、岩国藩は、重大事とし

船着き観音

可児市

船着き観音さまが、 あたり一面が海のようになることもたびたびでした。 今ではすっかり穏やかな可児川もその昔は氾濫し、 雨粒は激しく川面をたたき、川の水はあふれんばかり そんな大雨の日のことでした。 広見地区の山岸という集落においでになったのも

「こんな日に、舟を出しておる者がおるぞ。 どうもなければええが... 木の葉のように漂う小舟を、村人は見つけました。

おい、変やぞ。舟が光っとる」

そんな濁流のなか、

びっくりした村人は大急ぎで船を出し、 やっとの思いで小舟に近づき中をのぞいたとたん どのくいらいたったことでしょう。 波間に見え隠れしている小舟をめがけて、 村人は両手を合わせ、その場にひれ伏しました。 力いっぱいこぎ始めました。

観音さまや、観音さまがおいでになる。

小舟のなかには、

するとどうでしょう。 村人は、観音さまの乗った小舟を きてくださったにちがいない」 自分たちの舟にしっかりとくくりつけ、河岸をめざしました。 金色に光り輝く観音さまが休んでいらっしゃったそうです。 この観音さまは、わしらを助けに ありがたい、ありがたい、はようお連れしよう」 この観音さまの手には水かきがついていることから、 観音さまをお祀りしました。 村人たちはさっそく観音堂を建立し、 舟や川で仕事をする人たちがお参りにくるそうです。

雨はやみ、風はおさまり、

あたり一面がぱあっと明るくなりました。

そんな願いは通じ雨をいただいたそうです。

古老の話によれば、

最後の頼みとして雨乞いをお願いするそうです。

そして、水神さまにお参りしても日照りが続いたときに

そのうえ、太陽まで顔を出し、

舟は川面をすべるように進みました。

なんとも不思議な話です。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分~午後4時30分 《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始 《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分 名神羽島I.Cから車で約30分 東名阪長島I.Cから車で約10分

お問い合わせ》 船頭平閘門管理所

木曽川文庫 〒496-0947 愛知県 愛西市立田町福原 TEL(0567)24-6233



集接 H記

では、読者のみなさんの声で構成する を企画しています。身近でおこった出 地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県可児市の皆様 及び、丸山幸太郎氏にご協力いただきありがと うございました。お礼申し上げます。

次回は、三重県木曽岬町を特集します。ご期 待ください。

「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームペーシ www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp

上:可児川堤の桜並木 中:川合次郎兵衛塚1号墳 下左:花フェスタ記念公園 下右:兼山瀞

FKISSO_aVol.58

SSO』Vol.58 平成18年4月発行 :国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 木曽川下流河川事務所ホームページ URL http:// TEL(0594)24-5715 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu

制作: 財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976